

# 結草

kusamusubi

publishing house: 2-19-52 MoriYama Kanazawa  
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922  
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2012.05.01

## まことを依り処とし共に歩まん

大谷大学名誉教授 木村 宣彰

どうもお忙しいところ、ようお参りいただきありがとうございます。だんだん金沢との縁が深くなりましてね、浄光寺さんとも十年間ご縁をいただいで本当にありがとうございます。今日はお彼岸のお日中、「お太子さん」の法要でございます。お彼岸のお日中と言ったら、皆さんにご説明しなくても、太陽が真西へ沈むわけですね。中国の善導大師はお日中の日に西側をずっと眺めなさいと。太陽が西に沈むのを見て西方浄土を想う、これは一体どういうことか。

ただこう遙か彼方にお浄土があると理想の世界があるということ。想うことも尊いけれども、もうひとつ大事なことは、お浄土からお浄土に立つて、この世界を見たらどうなるかということを考えないといけないと思うのです。私たちはこの娑婆にいますと、娑婆がすべてであつて、この娑婆で争いがあつたり、争いごとがあつても、これはまあ娑婆のことだからと思うけれども、お浄土からこの私たちの世界を見たらどうなるか。お浄土とはどういうものか、想いを寄せないといけないので

すわね。

お浄土というのは地獄もなければ餓鬼道もないし、畜生道もない。お浄土のことを書いた『大無量寿経』の第四番目の願(「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、形色不同にして、好醜あらば、正覚を取らじ」真宗聖典・一五頁)を「無有好醜の願」という。好醜というのは、好いと醜いということですね。きれいだ、きれいではないと。私たちはみんな平等だと言っているけど、実はあんまり平等が好きじゃないんですよ。例えば、今日着てきた洋服は、あの人よりはちよつとはいいかなあと、みんな思うのですよ。みんな平等だ、平等だと言いながら、やっぱり自分はどこかちよつと優れているなあと。人間には必ずそういう慢心があるわけですよ。ですからスポーツを観ておつてもね、私と彼はライバルだ、力はほぼ同じくらいだと思つたらね、必ず相手のほうが上ですよ。なぜな

必ず相手のほうがちよつと上になる。人間といつたらそういうものですよ、そういう煩惱があるわけですよ。そういう好い悪い、好醜あることなしというのですから、お浄土の世界は好いも悪いもない、みんな平等だ。だから柳宗悦先生は立派な焼き物は立派な焼き物だけれども、普段使う湯飲み茶碗もやっぱり綺麗なのではないだろうか、好い悪いなどないのではないだろうかと言つて民芸運動をなさつたわけです。浄土からこの娑婆世界を見た時に、やっぱり浄土は素晴らしい世界だなど。そういう世界から私たちの世界を見たら、今の娑婆はどうなっているかということを考えさせられます。こんな素晴らしい世界だったら、そういう世界に行きたいなというのが往生を願う心ではないですか。しかし、往生とは死にたいということではないですわね。「死にたくない」という気持ちを誰でも持つているわけですよ。この間の震災を見て二万人近くの人たちが亡くなり、行方不明になっておる。そして私たちは生きておる。そ

れで死というものは大変なものだ、  
一大事だと思うのだったら、それと  
同じように私が生きているという  
ことがいかに尊いか同じ気持ちで思  
わないといかん。「死は嫌だなー、死  
は嫌だなー」と思うけど、生きてい  
ることは当たり前だと、こう思っ  
ているわけです。しかし、そうではな  
い。死がそんなに一大事で大変だつ  
たら、今私が人身にんじんを受けて生きてお  
るといことは、それと同じくらい  
尊いことだということに想いを寄せ  
て、今日、浄光寺さんのお太子さん  
にお参りできたことは有り難いす  
よ。それは今言った彼岸の世界から  
此岸しがんの迷いの世界を見直すというこ  
とではないですか。そういう仏事に  
遇わせていただいて、そんなことに  
気づかんと「当たり前やなー」とこ  
う思っているけれども、人間として  
生かさせていただいたことがいかに  
尊いことか。「死にたくない」、「長  
生きしたい」、「健康で生きたい」と、  
こう思っているんだしたら、やっぱ  
りその死が一大事だと思うのと同じ  
くらいの気持ちで「いやあーこの世  
の中に縁あって生まれさせていた

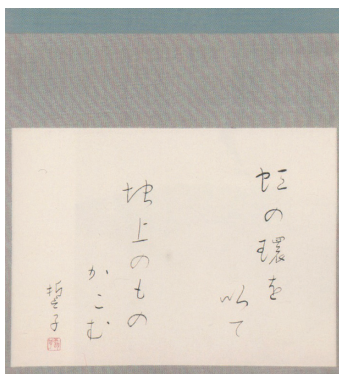
いたことは尊いことだ」と思いたい  
ですね。  
太陽が沈んだ先にお浄土がありま  
すよというだけじゃなくて、お浄土  
の世界は好い醜いがない。そうだと  
すれば、この娑婆はこんなもんばっ  
かりで動いているじゃないか。平等  
だ、一緒だと言いながら、やっぱり  
競争しているではないですか。そう  
いう世界ではなく、みんなで共に歩  
ける世界を、生きる世界を考えるこ  
とが大事だと私は思うのです。その  
ためにこの仏事がある。なかったら  
ね、すべてが当たり前になっしま  
います。

先ほどね、お座敷で少し休ませて  
いただいた。そしたらね、立派な軸  
が掛かってましたね。「虹の環わを以  
て地上のものかこむ」と書いてあつ  
た。これ素晴らしい。地上には苦し  
んでいる、あるいは争っている、あ  
るいは飲みたい、食べたいと思っ  
てる様々なものを空にかかった虹の  
環わが包んでおると、こういう軸が掛  
かっておった。いい言葉だと思  
いません。そういう世界に目を向け

る。そうすると生き方も変わって  
るのではないでしょう。これが好  
い、これが醜いと言っておるけれど  
も、そうではない。それを包むよう  
な世界に目を向けた時に、やっぱり  
全然違ってくるんですよ。本当は虹の環  
に包まれているんですよ、私たちは。  
でも虹の環のことは見ないで地上の  
争いさかいや争いさかいばかり見ているのだけ  
から、好いとか醜いとかとなっしま  
う。もっと大きな、虹の環を以て地  
上のものを包んでおる、そういう世  
界を思い浮かべる。それがお彼岸の  
大事なことではないでしょうか。

今日はお太子さんでしょう。そう  
すると聖徳太子には限りない素晴ら  
しいお徳があると思います。しかし  
聖徳太子さんは立派だったという  
ことだけでなくて、聖徳太子さん  
のお立場から見たら、私たちがどう  
いうふうに見えるかということを考え  
てみないといけません。お太子さん  
のお徳、これを説明しておいたら数限  
りなくあるのですけれども、私たち  
の生きる上での大事なものをお示し  
いただいたと思っておるのですよ。

第一は「和」ということ。『十七条  
憲法』の第一条に書いてありますね、  
「和をもつて貴たつとしとなす」（真宗聖  
典・九六三頁）和わというのが貴い  
だ。今、震災を通して「絆きずな」とい  
うことが大変大事だと。絆きずなというこ  
とは、言わば和ということですよ、  
みんなで力を合わせましよう。し  
かし絆きずなという言葉自体は、糸偏いとへんに半  
でしょう。絆きずなということは言うま  
もなく大事なことでけれども、漢字  
の持つている意味は、私の牛だとか、  
私の犬だとか、私の馬だとか、これ  
はわたしのですよと繋いでおくこと  
です。これはあなたの馬とは違いま  
すよ。絆きずなという言葉自体は私の馬、  
私の牛、私のペットと。このように  
自分のものと他人のものを分けるよ



山口 誓子 (1901年-1994年)

うな意味合いを持っていますわね。仏教はね、同じ糸偏だけれどもそれを「縁」といっています。有縁の人々も無縁の人々も全部包みこむ。今日、お座敷に掛かっていた「虹の環を以て地上のものかこむ」というのは、私の牛だとか私の馬だとかそういうものを超えて全部包みこむ世界が軸に書いてあった。もちろん自分の家族や血縁なども大事ですが、そういうものを超えた地上のありとあらゆるもの、美しいもの美しくないもの、苦しいもの苦しくないもの一切を包んでおる。ちょうど天にかかった虹が地上のありとあらゆるものを包むように。

『十七条憲法』の中で今言っている個々の絆も包みこむような、そういう和が大事だところおっしゃる。それをお太子さんはどうして仰せになったのか。ここが大事だと私は思っておるのですけれども。共に凡夫だと。今の総理大臣よりもっと力を持って国を動かしていた人ですよ。その聖徳太子が、あなたも私も共に凡夫だと、こう仰せになっておる。これはなかなか言えないことで

す。だから和を実現していかなければならないと。

お太子さんの一番尊いことは、今言っている和ということももう一つはね、本当の依り処。私たちは何を頼りに生きるのかという、その依り処が大事だとお太子さんはおっしゃっている。一番端的な言葉は「世間虚仮唯仏是真」(『上宮聖徳法王帝説』)とこうおっしゃる。世間は虚仮である。何に依っていくのか、何を依り処とするのか。会社は大事だし、いろんな物を頼りに生きていくけれども、究極的に大事な物は何か。依り処、それは一体何か。お太子さんは、それは自分の奥さんに言い聞かせながら亡くなった。奥さんである橘大郎女は、こんな大事なことはどうして残さなくてはいけなさと刺繍を作つて、そこに太子のお言葉ですよと残していただいたのが「世間虚仮唯仏是真」。唯仏是真、この仏が本当の依り処であつて、それ以外のものは美しいとか美しくないとかそういうものを問題にしておる世界ですよとおっしゃった。

私はお太子さんの書かれた『三経義疏』だとか『十七条憲法』とか読むと色んな事を仰せになっていくけれども、私が一番感動を受けたものは和というものは高い。そこには「共」ということがなければならぬ。なぜ共ということが実現するか、それはみんな凡夫だからだ。

法然上人や親鸞聖人が比叡山の仏教から下りられた。なぜお念仏の道に入られたか。比叡山の修行は大変だ。あんなに厳しい戒律を守つて法然上人や親鸞聖人は常行三昧堂にて九十日間常行三昧の修行をなさつた。南無阿弥陀仏を九十日間称え続ける。正座して坐ると足が痺れるから立つたら楽やなと思ふけれども、九十日間立っていたら血が下がり足がパンパンになって足袋のコハゼが吹っ飛んでしまうところ言っていますね。そんな行は大変だから山を下りて簡単なお念仏に行かれたように思ふかもしれないけれども、それは間違いですよ。自分のことが分かったからです。自分がどういふ人間なのか、仏になれるような人間ではなくて凡

夫だということに気づいたからお念仏に行かれたのであつて、難しいより簡単な方が楽だからと選んだのであつたら、好いか醜いかといっているのと同じ事です。そうではなくて、自分のことがよく分かつたからこの道しかないということになったのです。

親鸞さんのご和讃に「畢竟依を歸命せよ」(真宗聖典・四七九頁)とありますよね。畢竟依といったら究極の依り処ではないですか。だから究極の依り処を知っている人とそうでない人とこれは違うわけです。どんなものを頼りにしてもみんな死ねばお終いですよ。そうすると死んでも失わないようないのちよりも大切なものに気づかないといのちの大切さが分からない。いのちよりも大切なものを依り処にしなければならぬ。自分のいのちを輝かせるものは何か。死ぬということが大変だと思ふのだったら、この世の中に人身を受けたということがいかに尊いことかということを感じさせていた。そういふ世界に目覚めなければ不平不満と貪欲だけで地獄へ行く

か、餓鬼に行くか、経巡る生活を送ることになるのではないかと思うのですね。そうだとすると今日、浄光寺さんのお太子さんの法要というものは、今言ったようなことを今一度私たちが考えさせていただく尊いご縁だと思ふのですよ。

「三・一一」で取り返しがつかないような原発の大変な事故があった。専門家はみんな「安全だ、安全だ」とこう言ったけれども、全然安全ではなかった。専門家もあんまり当てにならないあとこういふふうになっていますね。専門家というものは、確かに専門家でない人よりも知識や情報はたくさんある。しかし生まれる専門家というのはいね、共に歩む専門家だと思ふ。原発の問題だったら、「私はこんなに原発のことを知っている」というよりも「私も原発の事故があったら心配だ」と、私も心配だと共に考えるような、そういう専門家がやっぱり大事だと思ふ。

この間、新聞に鷺田清一わしだきよかずという先生がこう書かれていた。ある火山の専門家が

家もあれば、火山の専門家もあればあらゆる専門家がある。火山の専門家だったら、当然火山の噴火するのを予知してくれないと信用出来ないということになる。

ある高名な専門家が「火山は当分大丈夫です」と言ったんですよ。あちこちで爆発が起こっているんだけれども「当分は大丈夫ですよ」と。官房長官も「当分は大丈夫だ」と盛んに言うておったけれども、その火山が爆発した。そうしたら火山の噴火の被害を受けた人たちは、みんな怒るはずなんだけどね、怒らなかつた。それはなぜか。「私たちは、火山の先生をよく知っている。もういつもおも火山の火口を覗いて毎日様子を見ておる。私たちはその姿をよく見ておる。私たちと同じ道を歩いている。私が温泉に行った時も火口を覗いておる。私たちが正月お酒飲んで寝ている時もあの先生は、山へ登って火口を覗いておる。私たちは、その先生のことをよく知っている。だから先生が火山の爆発が起こつてもそんなことで怒らない」と言うんですよ。その話を聞いて本当の専門家とい

うものは、みんな共に歩んでおる人なんだと思ひました。あなたがたと違ってずっと知識がありますよ、というのが良い専門家と思ひがちだけれども、そうではない。みんな共に歩んでおるんですよ。事故が起こつたらどうしたらいいか。あなたが心配私も心配、一緒に考えているんですよ。

お太子さんはそういうことを私たちに教えてくださった。それはね、私たちの生き方に関わる問題ですよ。ご開さん親鸞聖人も仰せになっていますわね、「一人いて喜ばは二人と思ふべし二人いて喜ばは三人と思ふべしその一人は親鸞なり」(『御臨末の御書』)と。一人で悲しんでおつたら私も悲しんでおるぞ、二人で悲しんでおつたら三人だ、その一人は私だ。喜びも二人、悲しみももう一人いますよ。その一人は親鸞。これが共にということですよ。

今言った原発の専門家も火山の専門家も、あるいは先生も、あるいはお寺さんも、皆さんも共にということころがとても大事だ。それを聖徳太子は憲法の第十条に「共にこれ凡夫

(真宗聖典・九六五頁)親鸞聖人も「われら凡夫」と。われらの「ら」一つですけれども、大変尊いことだと思います。「あなた方と同じですよ」と聖徳太子も親鸞聖人も共に凡夫と仰せになつておる。この災害を機縁にして「共に」ということ、あるいは「和」ということを確かめていかなければいけない。

仏教では和合という。今日お集まりの皆さんは和合ですが、ひとりいても和合にならない。二人以上ないと和合にならない。「一人で仲良くしています」と言つたつて、ひとりで仲良くできないわけで、必ず皆さんと共に仲良くする。そういうことをお太子さんは私たちにお伝えくださった。親鸞聖人もやっぱり同じ事をお伝えした。それが今日まで一千年以上、伝わつて続いてきているんだと思ふんです。

それと同時にもう一つ私はずっとこのご縁をいただいて思つていることは、何が一番大切な依り処かということですよ。親鸞聖人のお言葉で言えば畢竟依です。究極の依り処。聖徳太子も隋ずいとの外交もおやりになつ

た。憲法もお作りになった。仏教の研究の『三経義疏』もお書きになられた。また摂政として様々な政もなさった。しかしそれは世間のことだ。「篤く三宝を敬え」（真宗聖典・九六三頁）と仏さんの世界こそが最高のの依り処だと。しかし今、何が本当の依り処なのかということが分からなくなっておるんじゃないかなということを感じておるわけです。ですからこそ、「お太子さん」という伝統の仏事を自信と誇りをもって次の世代に伝えなければならぬということをおもうんですね。

く さ む す び  
キリスト教の教会に行きますと、プロテスタントは牧師さん、カトリックは神父さんですが、お説教なさるでしょう。お説教なさったことをその通りだと分かった、そのことが分かったと理解する時、その「理解する」を英語で言ったら何と言いますか？「understand」。アンダーというの下でしょう。スタンドは立つでしょう。下に立つとこういう。下に私は立っていますよ。牧師さん、神父さんの仰せのとおりです。

あなたの言うとおりでと言う時には、上下関係があります。先ほどのお浄土は無有好醜、好いも悪いも、醜いも醜くないも、上も下もないといっている。そういう世界から見たら「understand」とは、明らかに下に立つということですよ。しかもそのことが英語では分かりました、仰せのとおりですと。

聖徳太子も親鸞聖人も共に凡夫だところ仰せになる。そこに開かれてくる世界とそれは随分違うのではないのでしょうか。娑婆ですから様々なことがありますよ。でも「虹の環を以て地上のものかこむ」ようなそういう世界にお太子さんも親鸞聖人も生きておられて、そのことを考えてみなさいよとこう仰せになっておる。

『歎異抄』の第五条（真宗聖典・六二八頁）に「一切有情」すべてのいきとしいけるものですから人間だけではないですよ。「世々生々の父母・兄弟なり」と。

親鸞聖人の時代にも『方丈記』に書かれているように大地震があり突

風が起り、京都の中心地の半分だけで四万二千三百人の死体があったところいつてますわね。仁和寺のお坊さんが一人ひとりの死体の額のところに梵字で「ア」の字を書いた。

そして数えたら四万二千三百人いた。それが親鸞聖人や法然上人の生きられた時代です。それを目の当たりにして何にもできない。その時に相当の悩みや苦しみがあったと思いますよ。今回の大震災でも二万人近い方がお亡くなりになった。みんなが世々生々の父母・兄弟だ、亡くなった人も今生きています。あるいはもつと言え、これから生まれてくる子供たちもみんな同じのちのちに生きています。

この間の本願寺の御遠忌テーマが「今、いのちがあなたを生きている」と。そのいのちとはどんないのち？スローガンだけでなくて、そのことを実感をもってその通りだと思わなければいけない。そういう世界に気づかせていただくというのが大事な事ではないかなと私は思うんですね。お太子さんが何を本当の依り処とするのか、何が理想の世界か、「和」

とか「共に」とかという言葉で示していただいたんだと思うんですね。

私も時間に融通つけられるようになったものですから、いろんな本を整理したりボチボチやっておるわけです。そうするとね、今まで気づかなかった本のほうが声をかけてくるんですね。「長い間積んで放ったらかしにしてなんとも邪見な奴だ、冷たいやつだ、たまには手をとって読めよ」てなもんでなんとなく本の方から声がかかる。それで時々、手にとつて読むと「あつ、こんなことが書いてあったんだ」というふうに出会う。それが楽しくてね、毎日生きています。やっぱり感動がなかったら一日が駄目です。今日こんな感動があったら、明日もつと素晴らしい感動があるかもしれないと、そう思ったら生き方がコロッと変わる。

生き方といったら「方」というでしょう。「方」とは「スタイル」ですよ。「型」ですよ。それと同時に「方」と言ったら「方向」ですよ。どこへ向かって進むかということが生きる上でとっても大事。仏法というのはね、

例えば五歳若返ったとか、痛い足が治ったとか、そんな話ではない。自分が何処に向かつて生きるのかという、生き方を教える。聞法する、聴聞する、教えを聞くということは、生き方を仏教にたずねるのです。

私たちは、何に迷惑しているか、迷い惑うのは、どこに進んで行ったらいいのかわからないからです。「私は、この道に進むんだ」ということさえきちんと決まれば、人間どんなに苦しくてもそれを超えられるんですよ。ただ西に行くのか、東に行くのか、南に行くのか分からなかったらぐるぐる回っておるだけで、その一日の日暮しが苦しいに決まっていますよ。西に行くんだということが決まれば、生活のスタイルも型も決まってくる。

道元禪師が比叡山で勉強しておったけども山を下りられた。やっぱりそこで迷いがあつたんですよ。それで中国(宋)に行かんといかんと言つて中国にいかれた。そして中国の船着場で典座(調理係)のお坊さんと出遇われた。

「あなたは何のために中国までこられたのか」、「仏法を習うため」と。次に「何のために仏法を習うんや」と言われたら、「みんなのため、広めるため」と。さらに「何のために広めんといかんのや」・・・とずっと問い詰められたら分からなくなってきたわけですよ。しかし道元禪師は、そのお坊さんに遇つて私の進む仏道の方向性が決まつたと。

親鸞聖人は二十九歳の時に比叡山を下りられて法然上人のところへお訪ねになり、その時に書いてますわね、「雑行を捨てて本願に帰す」(真宗聖典・三九九頁)。今までいろんな事をやっておつたけれども、これから自分の進む道が決まつたと。

よく若い学生さんたちと喋ると「私の天職がわかりません」と、こう言う。そりや、天職わかりませんよ、やってみなければ。天職が分かつたら天職にまっしぐらと言うのだけれども、それは人間国宝になつたような人たちが五十、六十、七十歳になつて「ああ、これが天職だった」と言うわけですよ。若い時はあれもできる、これでもできると可能性は無量大

にあるから迷うわけですよ。しかしその道一筋、その「筋」をずっといくと、これ以外の道が私にはなかつたという世界が開かれてくるわけですよ。そういうところに天職というものが見えて、ますます磨きがかかってくるわけです。ただ生きていだけじゃなくて、生きていけるのちが輝いてくれば人生もつと素晴らしいわけですよ。仏法というものは、こういう生きる方向性を私たちに示す。生き方の「方」には、スタイルの問題と方向の問題とが両方あるわけです。それが決まらなかつたらますます迷う。迷えば救われない。だから聞法というを通して私がどういう生き方をするのか、どこへ進むかというのをたずねることがやはり一番大事だと思ふんですよ。

お経の中に『百喻経』というお経がある。その中にお釈迦様が説かれた喩え話が載つておる。一人の先生を尊敬する弟子が二人いる。「私はこの先生のために一生懸命尽くすのだ」と二人の弟子が言うておる。それで先生が足が不自由になつてきた。

「先生の足をマッサージしましょう」と弟子が言う。ところがその弟子同士が仲悪いのですよ。先生のことを想つておる。本当は一緒に足を揉めばいいのに喧嘩をしているのだから顔も合わせたくない。俺は右の足を揉むから、お前は左の足を揉めというわけですよ。平等だと言いなながら人間というものは競争心があるから、右の足を担当した弟子は、先生から褒めてもらいたいと一生懸命に右の足を揉む。自分のことだけやればいいのにもう一人の憎らしい弟子がやっている左の足を石でガーンとやるわけですよ。そうしたら自分が担当した足は早く治ると先生から褒められる。やっぱり私はいいことをしたら反対の足を担当した弟子は同じことをするに決まっておるわけですよ。同じように反対の足を石でガーンと。両足が駄目になってしまう。でもその弟子たちは「共に先生のためだ」と、こう言っている。私はこの『百喻経』という經典を昔読んだ時に、こんな馬鹿なことは世間になかろうと思つたけれども、



古村 節子

今国会中継を観ているとね、国民の皆様、国民の皆様のためにと両方の人たちがおっしゃっているのだけれども、二人の弟子たちのようなことが毎日行われているように思うのですよ。仏法に触れて仏法の教えを聞くということは、これは私たちのやっていることは、いかに愚かしいことなのかを知ることです。そして、本当に先生のことを想うんだったら、共に顔を見合わせて、力を合わせてやらんといかんのではないかとということに気づく、それが法に遇うということだと思ふ。まさしく二千五百年前にお釈迦さんが説かれたことが、行われておる。お釈迦さんはお見通しだった。

今から二百年ほど前に上杉鷹山という人がいた。ご存知ですよ。山

形県米沢の藩主だった。ここは加賀さまの百万石の大きな藩ですけれども、米沢藩も昔、上杉だったから大きな藩だった。しかし、今から

二百数十年前の九代目の藩主の時代には、ずいぶん小さくなって十五万石位。その藩の八代目の時に借金がものすごくできたんですよ。それで江戸の商人も大阪の商人も「ああ米沢ですか、あそこにお金を貸したらあかん、貸したら貸倒れますよ。百年経っても借金が無くならないから駄目だ」と。この八代目の藩主はもう自己破産や。もう江戸幕府に返上しようと考えたんですよ。九州の大分、日向の高鍋藩のお殿様の次男坊さんが米沢藩にご養子に十七歳で入られた。そして、その藩を立て直すんですよ。十七歳で藩主となられた上杉鷹山が。

ある時、小さな火鉢を寒い時にフウフウと吹いておいたら、火が起こってきた。「私はいいいことを学んだ。一生懸命やれば火が起こるんだ」と言つて、彼はいいい政治をやるわけです。「今まで立派な着物を着ておったけれども、これからは木綿

で通すから藩の家老たちも全部木綿の着物にしなさい」と言つて実行するわけです。今までの生活費は千五百両だったけれども、これからは二百九両に減らすから」と。「女中さんが五十人いたけれども九人にしてくれ」と。行政改革ではないですか。十五万石は米の石高でしよう、これだけだといかんから「これから紙を作る楮、それから漆の木、そういう産業を興すものを百万本植えるところがない」と。「侍の屋敷がいっぱいあるじゃないか、そこに植えろ」と言つてそこで紙を作ったり、楮を作ったり、漆を作ったり。そうした十五万石だけと実際三十万石になるのではないか。十七歳の彼がそれを実行する。そして米沢藩に入る時にこういう誓いを立てるんですよ。

第一番目、私はこれから文武の修練を定めたとおりに怠りなく励むと。毎日きちんと生活の型みたいなの、毎日決められた時に本を読んで勉強をする。同時に侍として為すべきことは全部やる。第二番目、民の父母なるを第一の勤めとする。十七歳のお父さん。私はこれから藩の民の父母だといふのですよ。むしろ子供みたいな歳の殿様がですよ。第三番目、次の言葉を日夜忘れん。贅沢なければ危険なし。無駄遣いしなければ安心だ。だって藩の財政は破綻しているから国債千兆円みたいなものですよ。施して浪費することなかれという言葉を日夜忘れない。四番目、言行不一致。言うこととやることが一致しない、又は不誠実、無礼だということをやつたら、「もしそれを怠る時に直ちに神罰を下し家運を永代に渡つて消滅されんことを」と。もし不一致だったらどうぞ罰を与えて下さいと。マニフェストですとこのと違えますよ。神様と約束しているんですよ。そんなこと約束できますか？俺も事情があると言いたいところだけれども、神仏との約束は違うことではできません。しかも「どうぞ私に罰を与えてください」と、それを十七歳で藩に来た時、誰にも言わずに神仏に誓つた。

上杉鷹山はこんな約束事をして政を始めたのです。これはいわば誇りと信念とを持っているということ

しょう。自分の依り処を何処に持っているのかということですよ。この誓いの言葉は、大変尊い言葉だと思つて、今日皆さんに是非お話したいと思つて来たのです。

彼の詠った歌がある。「受け継ぎて 国の司の身となれば 忘るまじきは民の父母」。そしてもうひとつ皆さんもご存知かと思ひますけども、と成らぬ何事も成さぬは人の成さぬなりけり」と。「けり」は過去形ですよ。これでもう決着がついた。これ以外にはないぞというのが「けり」です。今も昔もこれからも変わらぬ真実だというのが「けり」ですよ。けりをつけるとは大変なことなんです。過去も未来も一貫するものでなければけりがつかん。しかし鷹山は「為せば成る 為さねば成らぬ」としなければならぬ。しな味と同時に「為さねば成らぬ何事も」と全部やらんといかんと云っているんですよ。

右の銘にしていたんですよ。いつものその言葉を見て政治家というものはこうでないといかんと。ケネディーですよ。ケネディーが何でそんなこと知っているんですか。そしてクリントン。今、奥さんが国務長官をやっている元大統領。日本の政治家で尊敬するのは上杉鷹山だと記者会見で喋っています。日本の記者は上杉鷹山？そんなもの知らないってなもんですよ。でもクリントンもケネディーも知っていた。なぜか。明治の時に内村鑑三うちむらみかんぞうという、この人はクリスチャンですけれども、彼が英語で代表的な日本人にこういう人がいますよと書いてある。その中に鷹山の伝記が書いてあります。それをケネディーもクリントンも読んでおつたんですよ。日本にはこんなに立派な政治家がいたんだと。「為せば成る 為さねば成らぬ」というのは、しなければ完成しないの言うまでもないけれども、私はあれもこれもみんなしななければいけない、それが私の仕事だ。民の父母だ。

のですから、この加賀とか越中とかから移住したのですけれども、その時の鷹山の藩は殆ど人口が減っていません。この鷹山の政治のおかげで。私は鷹山の政治のことを話すことが目的ではなくて、鷹山が何を依り処にして、どういう信念を持って政をなさったかということをお話したい。言行不一致で言うことと為すことが違つたら、どうぞ私に罰を与えて」と。普通だつたら出来んせんわね。皆さんに約束しますよ。でも仲間同士の約束だから不確かなもの。そうでなくて、この人は神仏に誓つて実行した。そうだからこそ国を超えて、世代を超えて、ケネディーもやっぱり私の依り処にしななければいけないと。

依り処、信仰に根ざすようなところ、そのおおもとを示していただいたのがお太子さんではないですか。聖徳太子の政治というものは、「篤く三宝を敬え」、そして「共に凡夫である」といった和の政治をなさつたわけだから、米沢の鷹山は太子の事をおっしゃっていないけれども、やっぱりその精神がずっと流れている。今日の混乱の時代になればなるほど今言つたような本當の依り処は何か、目指すべき方向は何かということがみんな考えていると思うので、事なことなのではないかと思うのですね。ありがとうございます。

《へんしゅうこうき》

◇親鸞さま晩年の「大・日本・粟散王…」和讃に太子さまへの思いが伝わる。一粒の粟の如くの小国王（粟散国）と言いなから大日本と臆するところはない。豊かな仏教の意を基とし、短期間に国体を整備・独立国として渡り合われた尊きお姿に、改めてその気概と自負を懐かれたのでしようか。勿論、太子さまに導かれて『内懐虚仮』こそが真実浄土に生まれる因となる世界が発起されたのです。「時」は経てば経つほど、真実が見えてくる。その時、追慕、畏敬の念が増幅されてくる事が多いのであります。（受）

◇本文は平成二四年三月二〇日の「おた いしさん」の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

◇挿絵は古村節子様にお問い合わせしました。

\*行事案内\*

「孟蘭盆会」 七月十三（十六日）  
「追弔会」 八月十三日（月）十時